

【カナダ研修報告】

平成 24 年 11 月 5 日～12 日 バンクーバー／トロント

■Berwick Child Development Centre (非営利団体運営 障害児保育施設)

大学敷地内にある施設。1952 年に施設ができ今年 60 周年になる。

職業を持つ親の家庭支援と発達障害をもつ子どもの保育を行う。

発達障害の保育は 1960 年からボランティアスタッフで始まる。1976 年から給料を払いスタッフをおく。

保育をしていく中で、健常児とミックスした保育が望ましいと解り、障害児と健常児の統合保育のモデルケースとしての施設となる。

80%健常児 20%障害児 (自閉症・ダウン症・小児麻痺・身体障害など)

6 クラス 88 名の子ども 全クラス 3～4 名のスタッフ

チャイルドプログラム 7 時～18 時 サポートプログラム 9 時～14 時

15 カ国の子ども達が過ごし、スタッフは英語で接している。

施設内の保育室にはマジックミラールームが隣接しており、保護者が子どもの様子を見たり私達のような見学者の訪問も、子ども達が気にせず過ごせるようになっている。

各クラスにキッチンがあるところが、日本の保育室とは大きな違いだった。乳児室の調乳室のようなものではなく、保育室の中で簡単なおやつ準備が出来るキッチンスペースになっている。

幼児も午前中スナックタイムといってお菓子とお茶を食べている。週 1 回は全クラスがベーキングデイといってお菓子作りを楽しんでいる。

保育室内は、日本の保育室と変わりなく遊びのコーナーに仕切られているが、部屋の広さとそこにいる子どもの数が違うので、どのクラスもゆったりとして見えた。

保育室の他に、トレーニングルーム・音楽ルーム・室内プールがあり園庭もとても広いスペースで作られていた。

障害をもつ子どもが入所する場合は、保護者も入りオリエンテーションなどしながら慣れていくようサポートする。スタッフ・保護者が話し合いプログラムを決めていく。

1～2 時間から始め少しずつ時間をのばし、最終的には保護者と離れて過ごせるようにする。1 日で慣れる子から長くて 7 カ月かかった子どももいた。

カリキュラムは遊びを中心に組み立て、遊びの中でコミュニケーション・社会性・感覚 (五感を使って学ぶ) を育てる。

子どもには、今何に注意を払うのかを伝える。拘りがある子どもは注意が払えないので遊びの中で気づかせ興奮を落ち着かせる。

トレーニングルーム…整列して移動したり、遊びの中で順番を守り社会性を見につけたりする。

音楽ルーム…音楽を通して発達をサポートする。クラスを半分ずつ2回に分けて週1回行う。スタッフがセッションしたり子ども達が楽器に触れたり出来る部屋。ここでも順番を待つ・話を聞くなどの経験もする。

スイミングプール…温水プール 30分のスイミングプログラム。ボランティアスタッフが来る。保護者も登録すれば子どもと使用する事が出来る。

泳げる事が目的ではなく、水の中で自信をもって楽しめるようにする。ライフジャケットも用意し、身体障害がある子どももサポートしながら楽しむ。

プレイタイム…子ども主体の時間。遊ぶことで発達を促す。手話や絵カードでのコミュニケーションも持ちながら過ごす。

園庭はとても広く、天候が悪くても必ず1回は外遊びをする事が決められている。

他にはない特徴のある施設。幼児施設でプール・トレーニングルーム・広い庭のある施設は珍しい。発達指導の資格をもったスタッフ、他の組織とも関わり協力して行っている。

予算は州・大学・寄付からでる。施設・設備（車いす・電気ドア・障害者用器具など）の充実に使われる。

統合保育は、幼児期は出来るが年齢が上がると困難になる。バンクーバーには障害児だけのプログラムは2~3か所ある。

小学校では障害児をクラスに入れるがスタッフがつく。クラスを分けて行っているところも少しある。高校になるとほとんどがクラスを分けているが、同じクラスで学べるケースも少しある。

カナダは子どものプログラムは充実している。大人むけのプログラムもあるが予算が少なく家族の責任と負担が増える。

※恵まれた施設の中で、子ども達がゆったりと過ごしていた。障害児も目立たずクラスの中で過ごしていた。スタッフの研修制度もしっかりと行い専門性の向上にも努めている施設であった。バンクーバーの中でも60年という歴史があり日本でいう認可された施設としての予算もしっかりついている。大学内施設ということもあつてか通う家庭は裕福な感じが受け取られた。

統合保育という事で、話しを聞く時間・遊びを楽しむ時間・トレーニングの時間がしっかりと組み込まれていた。話しへの集中は日本と同じで、手遊びや歌で導入を行い次への行動や活動を子ども達に伝えていた。

■YWCA Crabtree Corner Family Centre（女性支援・保育施設）

保育施設としてラセンスを得ている施設。州の補助金・基金などから運営。

建物は10年前に建てられたもので、事務所・病院・保育施設・住居が入っている。

住居は生活的に自立していない女性の為の住居となっている。

エリア的には生活レベルが低い地域。経済的に自立していない女性をサポートしている。アルコール中毒・麻薬中毒などの女性・妊娠前から母親・祖父母などへの教育も行う。祖父母へは親が要支援である場合、子どもを安全な環境におく為の教育。

保育センターは24名定員

3歳以下 12名 3歳以上 12名 （生後6週～6歳）

スーパーバイザー・8名のスタッフ

4・5階住居の家庭・近隣の家庭の子ども達が利用している。

施設住居は子どもが18カ月になったら出なければいけない。

カナダは多国籍の人種からなる国。歴史的には先住民族のインディアンがイギリスの支配のもとその教育が入ってきた事の弊害も大きく虐待なども増えていった。

現在もいろいろな問題が、女性や子ども達におきている。（失業やカナダ人との離婚後の女性支援など）

支援はそれぞれのケースにあったサービスを選ぶことで、改善され支援がとれるケースもあるが、上手く支援が進まないケースもある。

子ども達を取り巻く状況は変化している。いろいろな趣きを加えて見ていくことが主流となっている。ケースによっては子どもを離して親のサポートをする場合もある。

※建物の前には、煙草を銜え子どもを遊ばせている若い母親が何人もいる。地域的に生活支援・子育て支援の必要な地域。

保育センターは2フロアを使い、遊びのコーナー・テラス部分での屋外遊びスペースが取られていた。少し狭さは感じたがそこにいる子どもの人数が少ないので狭さは気にならなかった。子ども達は、好きな遊びを選び楽しんでた。私達が保育室に入ると人懐こく微笑んでくれたり、使っているおもちゃを見せてくれたりした。

先に見学をした施設とは支援のプログラム、施設の広さ、雰囲気の違いをととても感じた。この施設は保育に欠ける子ども達がいて、生活・子育てを支援しなくてはならない親達がいる。カナダの生活格差をととても感じた。

■ Vancouver Society of Children`s Centres (バンクーバー子どもセンター協会)

チャイルドケアプログラム「遊びからの学び」を行う

18 か月以下 (インファント) 12 名 (4 対 1)

18 か月以上 (トドラー) 12 名

3 歳~5 歳 (ジュニアキッズ) 25 名 (8 対 1)

保育時間 7 時 30 分~18 時

ランチ持参もしくは給食 (有料)

保育料は州・市より補助が出る。

チャイルドケア 就労家庭 80%

子どもへは敬意をもって接し、暖かい環境を整える。

子どもの興味を持ったものを満たして、就学前の教育と発達の手助けにする。

社会的・学習的・科学的なプログラムを取り入れ子ども達が人との関わりに自信をもって次のステップ (学校) へ行けるようにする。

両親との連携の中で、発達の遅れが見られる子へは他のプログラムへ連携していく。

ダウン症・自閉症・多動・言語などケアする。

遊びとサークルタイムに分かれているが、はっきり線引きせず子どもの姿の流れの中で行っている。18 か月以下のインファントクラスは、個人で時間が決まる。

就学前は小学校との連携をとっている。小学校の先生とディスカッションを行う。

健康面はしっかりと把握し病児の保育は行わない。

近隣公園へ散歩に出る事もある。

スタッフは1年のトレーニングライセンスを受ける。(大卒4年のライセンスもある)

学生実習も多く受けている。

レギュラースタッフ・カジュアルスタッフをおき、職員の休み等の時はカジュアルスタッフから出す。

※乳児クラス・幼児クラスに少しずつ入り見学ができた。幼児クラスは異年齢 24 名が、朝の集まりをしていた。私達が見ていると恥ずかしそうにする子、少し調子にのっておしゃべりをして注意されている子と、子どもの姿はどの国も変わらないと思った。

「3 匹のやぎのがらがらどん」の話をする。保育士が子どもの名前を呼び、呼ばれた子どもがヤギになってトロル (保育士) とのやりとりをしながら順番にテラスへ出ていった。日本の保育に近い内容だった。サークルタイムにあたる時間のようなのだが子どもに無理のない時間の中で楽しんでいるのが印象的だった。

■Vancouver Japanese Language School （日本児童向けデイケア施設）

1928年～100年の歴史のある建物を使用し、就学前の子ども達のデイスクールとして日本語を使った保育・日本の遊び・文化を伝えることを行っている。

また、建物の半分を使い小学生から大人までを対象とした日本語教室を行っている。

日系の人たち、日本を離れて生活している子ども達に日本の言葉・文化を伝え覚えることで日本に戻った時に困れないようにするため。

デイスクールの施設内を見学する。

保育施設としてライセンスがなくてはできないので、スタッフ・施設は整っている。

時間は幼稚園の時間プレスクール（9時～12時）・保育園の時間デイケア（7時～18時）があり、クラスは2歳児クラス・3歳児クラス・4歳児クラス・3・4歳児クラスがある。

プレスクールは20名定員（スタッフ2名）3時間のなかで、おやつをだす。

デイケアは25名定員（スタッフは幼児は8対1・乳児は8対2）午前午後のおやつとランチ（持参）を食べる。

キッチンスペースがしっかりとあるので、おやつ提供をしているがアレルギー対応には十分の注意をはらい、壁にアレルギー児の写真とアレルギー食材を大きく張り出している。

デイケアはまだオープンして間もないので、利用者は4名。

デイケア・プレスクール共に「あそびを通して学ぶ」ことを大切に、遊びの中から社会性・コミュニケーションを身に着けていけるよう取り組んでいる。

障害をもった子どもも重度でなければ、その子の成長を助けながら過ごせるようにする。

※急な見学に対しても、快く見学させて下さった。歴史の古い建物だが保育室内はパステルカラーに塗られ、優しい感じの保育室だった。各クラスの遊具は日本の保育園と同じような遊具が配置されていて、スペースがゆったりとしていた。

あそびを通して学ぶというところでは、子どものイメージを大切にしたカリキュラムがあり、子どもの姿から何に興味をもっているのかそこから遊びを発展させることも大事にしているといわれた。

掲示物・遊びの中に日本語が多く使われ、屋外テラスの壁面には富士山や横浜の街並みが描かれていた。

午前中であればたくさん日本の子ども達の姿が見られたと思うが、保育室を見ると、ここがカナダだと思えないほど日本の雰囲気にもまれていた。外国で暮らす日系の子どもや親の仕事で外国で暮らしている子ども達にとってはこのような施設があることがとても大切なことだと思った、

■ トロント

保険会社の企業内保育施設（デイケアセンター）

4 か月～5 歳までの子ども達が過ごしている。

約半数の子どもは保護者は保険会社の従業員で、他半数は近隣から通っている。

保育時間は 7 時 30 分～18 時 18 時を遅れると 1 分 1 ドル

クラス	インファントクラス（4 か月～18 か月以下）	3 : 1
	トドラークラス（18 か月～2 歳半）	5 : 1
	プレイスクール（2 歳半～3 歳半）	8 : 1
	ジュニアキッズ（3 歳～5 歳）	

子ども達の興味を遊びにつなげるプログラムを組み立てる。

遊びを中心にリラックス・自由な活動の中で個をしっかりと見ていく。

遊びに集中している子どもには職員が一人つくこともある。

子どもの安全性の為に安心して過ごせるように職員の責任は大きい。

プログラムには外部から先生を招いて取り入れるものもある。（音楽・スポーツなど）

行っている保育内容は、保護者に解り易く張り出している。

週案→活動→結果（報告書）→そこから子どもが何を学んだか→保護者に伝える。

日本でいう保育指針のようなマニュアルも保護者が解るようクラス前に置いてある。

保護者とのコミュニケーションは、お迎え時に個人ノートの内容を伝える。年齢が低いほど詳しく話す。

保護者からの苦情もあるが、要求の厳しい保護者にはグループでみている事を伝える。

資格を持っていたり高学歴の保護者ほど苦情は多い。

保育料はクラスによって違うが、収入が低い家庭は無料・シングルマザー・学生は補助金がある。

デイケア施設としてそれぞれのプログラムが継続的に運営されているか。プログラムは 1 年に 1 回見直されているかなど、立ち入り巡回が行われる。（アポイントなし）

経営面として保育士の人数・給与・補助などもみる。

※保育室を見学させてもらい、いちばん印象に残った所は各クラス前に週案が張り出され、行っている保育で子ども達が何を学んでいくのかが明確になっているところだった。簡単な図になっているので日本で保育士が書いている、書類形式ではなかった。

第三者評価でも今後の課題として助言された、保護者への伝え方というところでは大きなヒントをもらった気がした。

■ トロント教育省 教育アシスタント副大臣と面談

就学前保育・教育は家庭・保育園（デイケア）・幼稚園（キンダーガーデン）に分かれている。

カナダ全体が幼保の違いをなくす傾向にある。

最終目標としてはチャイルドケアとキンダーガーデンが統合されるよう。また、学校後の時間も同じところでやれるように省庁で取り組んでいる。

幼稚園職員は学校の先生のライセンスが必要（4年生大学学位）デイケアのライセンスはない。

幼保が同じチームになると幼稚園教諭と保育士が一緒になる。

遊びベースの学び（教育）、対人関係などの中でコミュニケーションも学ぶ。

クオリティープログラムでは質の向上を目標に赤ちゃんから学校まで、幼保の質の差がないように教育の質を取り入れていく。

（オンタリオ州チャイルドケア概要資料参照）

※オンタリオ州トロントの就学前教育の話しを聞いて行く中で、今、日本で行われている就学前教育と同じ理念のもとカナダも計画が進められている事がわかった。

どの施設においても、「遊びから学ぶ」が基本にあり、子ども達の保育がされていた。

また、ライセンスがあっても質の向上は求められ、それに対する学習システムはそれぞれの施設内でしっかりと行われている事も施設見学をしてわかった。

保育時間・人員配置数などの違いは、国の歴史・教育の考え方の違いがある。

保育現場の見学の中で、日本の今の保育園に必要なところは、一人一人の子どもの発達・姿を捉え遊びから何を子ども達は得ているのかを知る保育士の目が必要だと思った。

計画の中で子どもを遊ばせるのではなく、遊びの姿から計画が出てくるような保育現場にしていきたいと思った。また、その保育を保護者に解り易く伝え、子どもの育ちを共有できるようにしていきたい。

今回のカナダ研修で、いろいろな施設見学をさせて頂きありがとうございました。

貴重な経験になりました。

職員には各施設で写してきた写真、通訳の柳田さんに訳して頂いた資料とともに報告を行い、現場に活かしていきたいと思えます。

高野台保育園